

こう ふ じょう あと
甲 府 城 跡

甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う山梨県民会館跡地周辺
埋蔵文化財確認調査報告書

2020.3

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

こう ふ じょう あと
甲 府 城 跡

甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う山梨県民会館跡地周辺
埋蔵文化財確認調査報告書

2020. 3

山梨県教育委員会
山梨県県土整備部



1号トレンチ遠景



1号トレンチ石垣



1号トレンチ石垣（平面オルソ画像）



7号トレンチ腰石垣と江戸期石垣（写真奥）



7号トレンチ腰石垣



9号トレンチ西面石垣



9号トレンチ北面石垣

あらまし

甲府城跡は、武田氏滅亡以後、豊臣政権下において甲斐国（現在の山梨県）を治め、関東の徳川氏に対する抑えとして築城が開始された城郭です。江戸時代には徳川方の城郭となり、徳川一門が城主を務めるなど、江戸の西方の備えとして重要視されてきました。

本書で報告する山梨県民会館跡地周辺の区域は、甲府城追手門の東側にある一の堀や、堀に面する石垣が存在していました。平成29年12月に、甲府城南側の整備内容を示した『甲府城周辺地域活性化実施計画』が策定され、この実施計画に伴い、今後の山梨県民会館跡地周辺の整備に必要となる情報を収集すること目的に確認調査を実施しました。

《甲府城築城期の石垣》

1号トレーニチと9号トレーニチからは、甲府城築城期に築かれたと考えられる野面積み石垣がみつかっています。

なかでも1号トレーニチで検出された石垣は、出隅とよばれる石垣の角の部分であり、石垣の一番下に積まれる根石が残っていました。また、根石の直下には石垣の沈下防止のための胴木が確認されています。この胴木には、木杭が打ち込まれている部分が複数あり、胴木の変状防止のために設置されたものと考えられます。



1号トレーニチ 石垣と胴木

《甲府城一の堀》

1号トレーニチの東側において甲府城一の堀がみつかっています。

堀底は石垣から堀の中心部である東側に向かって傾斜しており、最も深い部分では地表下約2.35mの深さになります。

堀の上部には石垣を構成していたとみられる1m大の安山岩もみつかっており、昭和初期に石垣を解体し、一の堀を埋め立てた状況がみてとれます。



1号トレーニチの堀

《腰石垣》

7号トレンチからは、最大高さ約0.95mの甲府城築城期に築かれたと考えられる野面積み石垣がみつかっています。

この石垣は腰石垣とよばれ、7号トレンチの西隣に現存する甲府城築城期の石垣の変状を防止するために設置されたものと推測されます。



7号トレンチ 腰石垣

《造成層》

8号トレンチは7号トレンチ西隣に現存する甲府城築城期の石垣の裏側にあたり、江戸時代に描かれた絵図では、背面石垣や石垣上にのぼる石階段等が描かれている地点にあたります。

石垣や階段は、昭和初期以降に解体されてしまい、8号トレンチの南端部では安山岩の岩盤が表土層の下にみられました。この安山岩岩盤の北側には、しまりが極めて強い造成層が地表下約1.8m以上堆積しており、かつて深い谷状の地形であった8号トレンチ付近を埋め立て、その上に石垣を築いていた状況がうかがえます。



8号トレンチ 岩盤



8号トレンチ 造成層

序 文

本報告書は、甲府城周辺地域活性化実施計画に伴い、山梨県埋蔵文化財センターが平成 30（2018）年度におこなった甲府城跡の埋蔵文化財確認調査の記録をまとめたものです。

甲府城跡は、今から約 420 年前の安土・桃山時代に、関東の徳川氏を牽制するために、豊臣秀吉の命により築かれた城郭です。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦い以降の江戸時代には、徳川方の城郭として位置づけられ、徳川一門が城主として配置されるなど、幕府の中心地である江戸を守る西の備えとして重要視されていました。平成 30 年 2 月には、築城期の野面積み石垣が良好に残る東日本における初期段階の織豊系城郭であり、近世の政治や軍事の歴史を知ることができる貴重な城郭であるとして、国の史跡に指定されています。

今回確認調査を実施した山梨県民会館跡地周辺の区域は、甲府城の南側、追手門の東側にあった一の堀や二の堀に面する石垣などが存在していた範囲にあたります。昭和初期以降、周辺の開発により、石垣の解体とともに一の堀の埋め立てがおこなわれ、それらの正確な位置や残存状況等は不明なままでした。

今回の確認調査により、甲府城築城期に築かれた石垣や一の堀の痕跡を確認するとともに、石垣直下の胴木や石垣背面の地盤造成層、石垣をおさえる腰石垣など、軟弱な地盤に強固な石垣を構築するための土木技術の一端を確認することができたことは大きな成果でした。

これまで甲府城跡および甲府城をとりまく甲府城下町の様相は、舞鶴城公園整備事業や山梨県庁舎耐震化等整備事業、甲府駅南口周辺地域修景計画事業などの各種事業にともなう調査により、少しずつ明らかとなっていました。これらの調査成果とともに、本書が甲府市中心市街地さらには本県の歴史・文化財に関する学習や研究のために、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

末筆ではありますが、確認調査および報告書作成にあたり、ご指導・ご協力をいただいた関係者、関係機関に厚く御礼申し上げます。

2020年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 馬場 博樹

例　　言

- 1 本書は山梨県甲府市丸の内一丁目地内に所在する県史跡甲府城跡および周知の埋蔵文化財包蔵地甲府城跡の埋蔵文化財調査(確認調査)の報告書である。なお、調査地点は平成31年2月26日に国史跡に指定されている。
- 2 埋蔵文化財調査は甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う事前調査であり、山梨県県土整備部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが平成30年度から平成31（令和元）年度までの期間で確認調査・整理・報告書作成を実施したものである。
- 3 埋蔵文化財調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体：山梨県教育委員会

調査機関：山梨県埋蔵文化財センター

所長：馬場博樹　　次長：高野玄明　　史跡資料活用課長：今福利恵

担当：副主査・文化財主事正木季洋、非常勤嘱託 塩谷風季（平成30年度）

- 4 本書の執筆・編集は正木がおこない、確認調査における遺構等の写真撮影は正木・塩谷が、報告書掲載出土遺物の写真撮影は正木がおこなった。

- 5 確認調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。

確認調査期間：平成30年5月14日～7月6日、9月10日～10月11日

整理作業期間：令和元年9月2日～令和2年3月13日

- 6 整理作業は山梨県埋蔵文化財センターでおこなった。

- 7 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターで保管している。

- 8 埋蔵文化財調査に係る調整機関は山梨県教育庁学術文化財課であり、調整担当者は主任・文化財主事久保田健太郎である。

- 9 埋蔵文化財調査における世界測地形座標に基づく基準点・水準点の測量および1号トレンチ検出石垣の測量および図化作業は昭和測量株式会社に、7号トレンチおよび9号トレンチの図化作業は株式会社テクノブランディングに委託した。また、遺構の測量および図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。

- 10 埋蔵文化財調査にあたり、次の方々・機関よりご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表す。（敬称略、順不同）

〔協力者〕 北原糸子・十菱駿武・末木健・萩原三雄（山梨県文化財保護審議会委員）、伊藤正彦・志村憲一・平塚洋一・佐々木満・伊藤正幸・林部光・鷹野義朗・山下孝司・望月健太・奥石麻利（甲府市教育委員会）、宮澤公雄（公益財団法人山梨文化財研究所）、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会

〔作業員〕 発掘作業員：角田光夫・齊藤幸雄・保坂悌司、三国谷善浩

整理作業員：清水真弓

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。
- 2 出土遺物の注記に用いた遺跡名の略号は全て「H30 コウフジョウ」とした。
- 3 調査区は世界測地形座標により設定しており、遺構図版におけるX・Y軸延長線上に付した数値は座標線の数値であり、南北のグリッド線および図中の北印は真北を示す。
- 4 遺構断面図立面図の左側基点に付した数字は標高（m）を表す。
- 5 遺物観察表中の（）付き数字は次のとおりである。

〔土器・陶磁器〕 口径・底径：推定値　　器高：残存値　　〔瓦〕 長さ・幅：残存値

- 6 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2008年版による。

目 次

巻頭写真図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1	第2節 遺構と遺物	9
第1節 調査に至る経緯	1	第1項 1号トレンチ	9
第2節 調査の目的と課題	2	第2項 2～6号トレンチ	18
第3節 確認調査の経過	2	第3項 7号トレンチ	19
第4節 整理作業等の経過	3	第4項 8号トレンチ	24
第2章 遺跡の位置と環境	4	第5項 9号トレンチ	25
第1節 地理的環境	4	第4章 総括	29
第2節 歴史的環境	4	写真図版	
第3章 調査の方法と成果	7	報告書抄録・奥付	
第1節 確認調査の方法	7		

図 版 目 次

第1図 平成24・25年度確認調査位置図	2	第11図 1号トレンチ出土遺物(2)	17
第2図 調査位置図	5	第12図 2～6号トレンチ土層模式図	18
第3図 調査範囲図および甲府城全体図	6	第13図 7・8号トレンチ全体図	20
第4図 「楽只堂年禄」第173巻附図 甲府城絵図 (部分)による調査位置	7	第14図 7号トレンチ石垣立面図・8号トレンチ 土層図	21
第5図 甲府城跡山梨県民会館跡地周辺確認調査 全体図	8	第15図 7号トレンチ出土遺物	23
第6図 1号トレンチ全体図	10	第16図 9号トレンチ全体図	26
第7図 1号トレンチ石垣平面図	11	第17図 9号トレンチ石垣立面図	27
第8図 1号トレンチ基本土層図	13	第18図 9号トレンチ石垣横断面図	27
第9図 1号トレンチ石垣立面図	13	第19図 9号トレンチ石垣改修・欠落状況図	28
第10図 1号トレンチ出土遺物(1)	16	第20図 甲府城跡旧谷状地形イメージ図	30

表 目 次

第1表 1号トレンチ石垣石材観察表	9	第6表 1号トレンチ木製品観察表	17
第2表 1号トレンチ陶磁器・土器観察表	15	第7表 7号トレンチ石垣石材観察表	19
第3表 1号トレンチ瓦観察表	15	第8表 7号トレンチ陶磁器・土器観察表	23
第4表 1号トレンチ金属製品観察表	15	第9表 7号トレンチ瓦観察表	23
第5表 1号トレンチ錢貨観察表	17	第10表 9号トレンチ石垣石材観察表	25

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成24年3月に山梨県および甲府市により策定された『甲府駅南口周辺地域修景計画』(以下「南口修景計画」という。)において、甲府城周辺地域は「歴史と文化へのアプローチゾーン」に位置づけられ、甲府城を活かし、歴史・文化を感じられる空間づくりにより、甲府市中心市街地の活性化につなげることを目指している。この南口修景計画を受けて平成28年6月に策定された『甲府城周辺地域活性化基本計画』において、甲府市中心街における集客の核となる可能性がある甲府城南側エリアの整備が重要とされ、そのコンセプトと考え方が示されている。さらに、平成29年12月には、甲府城南側エリアにおける具体的な整備内容や事業主体などの基本的事項が示された『甲府城周辺地域活性化実施計画』が策定され、その中で山梨県民会館跡地周辺は、甲府城の石垣や堀を活用した広場ゾーンに位置づけられ、堀の復元や追手門広場、芝生広場の整備が計画されている。

山梨県民会館跡地周辺は、甲府城の一の堀や石垣等の遺構が江戸期の絵図に描かれており、それらの遺構の存在が推測されるものの、昭和初期の石垣解体および一の堀埋め立て以後、山梨県民会館や山梨県庁東側立体駐車場等が建設され、甲府城に関する遺構の残存状況は不明のままであった。

平成24・25年度に実施した確認調査(第1回)では、甲府城一の堀に関する想定される杭列等が確認されたが、調査は既存構造物・埋設物等により限定されたものであり、全体像は依然として不明なままであった。平成29年度、山梨県庁東側立体駐車場の解体作業時に立会調査を実施したところ、旧山梨県民会館公会堂基礎下に甲府城一の堀や石垣等の遺構が残存している可能性が指摘された。そのため、山梨県教育庁学術文化財課と事業主体である山梨県県土整備部都市計画課で協議をおこない、今後策定される整備基本計画に必要となる地下遺構の詳細情報を確認するための埋蔵文化財調査(確認調査)を平成30年度に実施することになった。

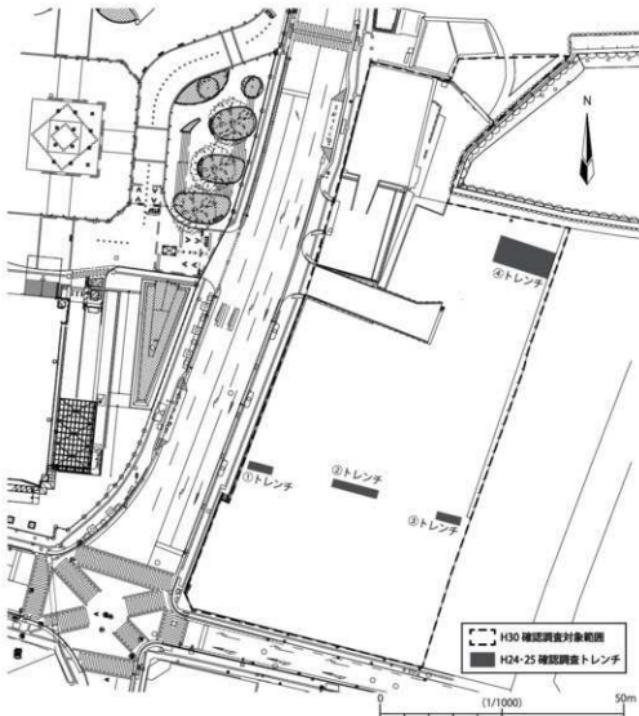
平成30年5月8日、6月6・13日、7月10・26日に山梨県教育委員会(学術文化財課・山梨県埋蔵文化財センター)と山梨県県土整備部(都市計画課・山梨県中北建設事務所)による協議をおこない、埋蔵文化財調査実施にあたっての留意点等を相互に確認し、調整を進め、5月14日から7月6日の期間で調査対象エリアの南側部分の調査(第一次調査:1~6号トレント)を、9月10日から10月11日の期間で北側部分の調査(第二次調査:7~9号トレント)を実施した。

なお、今回の埋蔵文化財調査に係わる法的手続き等は以下のとおりである。

法的手続き等

- ・平成30年4月16日付けにて「平成30年度甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う県民会館跡地内の埋蔵文化財試掘確認調査に関する確認書」を山梨県県土整備部都市計画課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで交換。
- ・平成30年5月14日付け教理文第109号にて文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。
- ・平成30年7月9日付け教理文第230号にて文化財保護法第100条第2項の規定による埋蔵文化財発見についての甲府警察署長への通知の提出を山梨県教育委員会教育長へ依頼。
- ・平成30年9月10日付け教理文第351号にて文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査着手の報告を山梨県教育委員会教育長へ提出。
- ・平成30年9月12日付け教理文第358号にて都市公園法第6条第2項に基づく都市公園占用許可申請書を山梨県知事に提出。
- ・平成30年9月12日付け教理文第359号にて山梨県文化財保護条例第35条第1項の規定による県指定史跡甲府城跡の現状変更許可申請書の山梨県教育委員会教育長への進達を甲府市教育委員会教育長へ依頼。
- ・平成30年9月19日付け山梨県指令中北建第11197号にて、山梨県知事による都市公園法第6条第1項の規定に基づく都市公園の占有を許可。
- ・平成30年9月28日付け山梨県教育委員会指令教学文第2011号にて、山梨県教育委員会による山梨県文化財保護条例第35条第1項のに基づく県指定史跡甲府城跡の現状変更の許可(甲府市教育委員会経由)。
- ・平成30年10月11日付け教理文第407号にて文化財保護法第100条第2項の規定による埋蔵文化財発見についての甲府警察署長への通知の提出を山梨県教育委員会教育長へ依頼。

- 平成 30 年 10 月 24 日付け教理文第 427 号にて、山梨県教育庁学術文化財課長に埋蔵文化財調査の終了を報告。
- 平成 30 年 10 月 26 日付け教理文第 359 号-1 にて、山梨県文化財保護条例施行規則第 9 条第 3 項の規定による県指定史跡甲府城跡の現状変更終了報告書の山梨県教育委員会教育長への進呈を甲府市教育委員会教育長へ依頼。
- 令和元年 7 月 16 日付けにて「令和元年度甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う埋蔵文化財確認調査の本格的整理作業及び発掘調査報告書作成に関する確認書」を山梨県県土整備部都市計画課長と山梨県教育委員会学術文化財課長とで交換。



第1図 平成 24・25 年度確認調査位置図

第2節 調査の目的と課題

本調査地点においては、前述のとおり、甲府城の一の堀や石垣等の存在が推測されているものの、残存状況や正確な位置等の情報が不明確な状況であることから、それらの甲府城に関係する遺構の残存状況や規模・構造等の今後の整備基本計画等に必要となる情報を取得することを目的とする。

第3節 確認調査の経過

確認調査の計画については山梨県埋蔵文化財センターが主体となり、正木・塩谷が作成した。確認調査は、山梨県民会館跡地および北側に隣接する都市公園舞鶴城公園（県史跡甲府城跡：当時）の一部、約 6,000m²の範囲を対象とし、江戸期に描かれた絵図等を参考に 9カ所の調査坑（1～9号トレンチ）を設定し、前述のとおり、2回（第一次調査・第二次調査）に分けて実施した。

《第一次調査》

第一次調査は、平成30年5月14日より着手した。5月14日から16日にかけて調査用施設・機材の搬入、16・17日にバリケード・防塵ネット等の仮囲いを設置した。

掘削作業は5月21日から開始し、バックホウによる表土除去後、人力による遺構等の精査および記録をおこない、バックホウによる埋め戻し作業をおこなった。1号トレントでは地表下に旧山梨県民会館公会堂の基礎が、5・6号トレントでは地表面がアスファルトにより舗装されていたため、それぞれブレーカー付きバックホウにより除却した。また、各作業時の粉塵対策として、高圧洗浄機による水の散布をおこなった。6月4日には昭和測量株式会社による4級基準点測量および3級水準点測量作業をおこなった。1号トレントで検出された石垣および胴木は、6月8日に昭和測量株式会社による写真測量作業をおこなったのち、6月12日に養生作業をおこなった。

6月22日から7月6日にかけて調査用施設・機材および仮囲いの撤収をおこない、第一次調査を終了した。なお、各調査坑における調査期間は以下のとおりである。

《第一次調査における各調査坑調査期間》

1号トレント：5月21日～6月20日

2・3号トレント：5月29日

4号トレント：5月31日

5・6号トレント：6月4日

《第二次調査》

第二次調査は、平成30年9月10日より着手した。9月10日から12日にかけて調査用機材の搬入・防塵ネット等の仮囲いを設置した。

掘削作業は9月13日から開始し、7・8号トレントはバックホウ、9号トレントは人力により表土を除去した。表土除去後、人力による遺構等の精査および記録後、バックホウおよび人力による埋め戻し作業をおこなった。また、9月19日には7号トレント検出の腰石垣、10月4日には9号トレント検出の石垣の写真測量作業を実施し、7号トレント検出の腰石垣については、9月26日に土糞による養生作業をおこなっている。10月5日から11日にかけて調査用機材の撤収をおこない、第二次調査を終了した。

なお、各調査坑における調査期間は以下のとおりである。

《第二次調査における各調査坑調査期間》

7号トレント：9月13日～27日

8号トレント：9月20日～10月1日

9号トレント：10月1日～5日

確認調査において出土した遺物は、第一次・第二次調査あわせて、プラスチック収納箱にして3箱の陶磁器・土器および瓦等である。

第4節 整理作業等の経過

平成30年度の整理作業は、出土遺物の洗浄および注記作業を第一次調査終了後の7月および第二次調査終了後の10月に、記録写真等整理作業を平成31年2月に、調査担当職員がおこなった。また、平成30年11月12日から平成31年1月31日までの期間で、1号トレントにおいて検出した石垣の実測図等作成業務を昭和測量株式会社に委託した。

平成31（令和元）年度は、令和元年8月9日から9月30日の期間で、7・9号トレントにおいて検出した石垣実測図等作成業務を株式会社テクノプランニングに委託するとともに、令和元年9月2日から30日にかけて、本格的整理作業として作業員を雇用し、出土遺物の実測・拓本およびデジタルトレース作業、遺構図面デジタルトレースを実施した。また、出土遺物の写真撮影・図版作成・原稿執筆・編集作業を整理担当職員がおこない、令和2年3月13日に報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

山梨県甲府市周辺の地形は、甲府盆地と呼ばれるフォッサマグナ西縁に発達した構造性盆地の一つである。甲府盆地とその外縁の山地との境界には、外縁の山地から流れ込む小河川により形成された扇状地地形が発達している。

甲府城跡は、甲府盆地北部から南流する相川が形成する扇状地上の扇端部付近に立地しており、この中にある一条小山と呼ばれる独立丘を利用して築かれている。一条小山は北東方向にある愛宕山から続く太良ヶ峰火山噴出部による溶岩、火山碎屑岩からなり、安山岩とこれをとりまく凝灰岩を主とした岩脈となっている。一条小山周辺は相川扇状地による堆積物が取り巻き、北東部は相川扇状地の東側山裾を南流する藤川によって深い谷地形となる。甲府城は、本丸、二の丸、稲荷曲輪、鍛治曲輪等が一条小山を利用してそびえ立つ主郭部分となり、その西側は北から清水曲輪、屋形曲輪、楽屋曲輪と呼ばれる方形に区切られた平坦で広大な区画が扇状地上に築かれている。

第2節 歴史的環境

甲府城の築城年代については、史料的制約から明らかになっていない。徳川家康の重臣である城代の平岩親吉の支配を経て、豊臣秀吉の天下統一後には羽柴秀勝・加藤光泰が、順次、甲斐国に配され、浅野長政・幸長にいたって豊臣方の城として築城が進められ、完成をみたとする考えが有力である。

慶長5年（1600）に浅野長政・幸長が紀伊国和歌山に転封され、甲斐国は再び徳川家康の支配下となり、以後、徳川一門が城主となる。寛文4年（1664）には甲府城主徳川綱重により、甲府城の大修理がおこなわれている。

宝永元年（1704）に綱重の子徳川綱豈が5代将軍徳川吉宗の養子となり江戸城西の丸に配されると、吉宗の側用人である柳沢吉保が甲府城主となり、吉保の子の由里の代にいたるまで、柳沢氏の治世は約20年間におよんだ。この間、吉保は屋形曲輪・楽屋曲輪などの殿舎の造営と石垣の修築などの整備に力を注ぎ、甲府城はもっとも整備された。

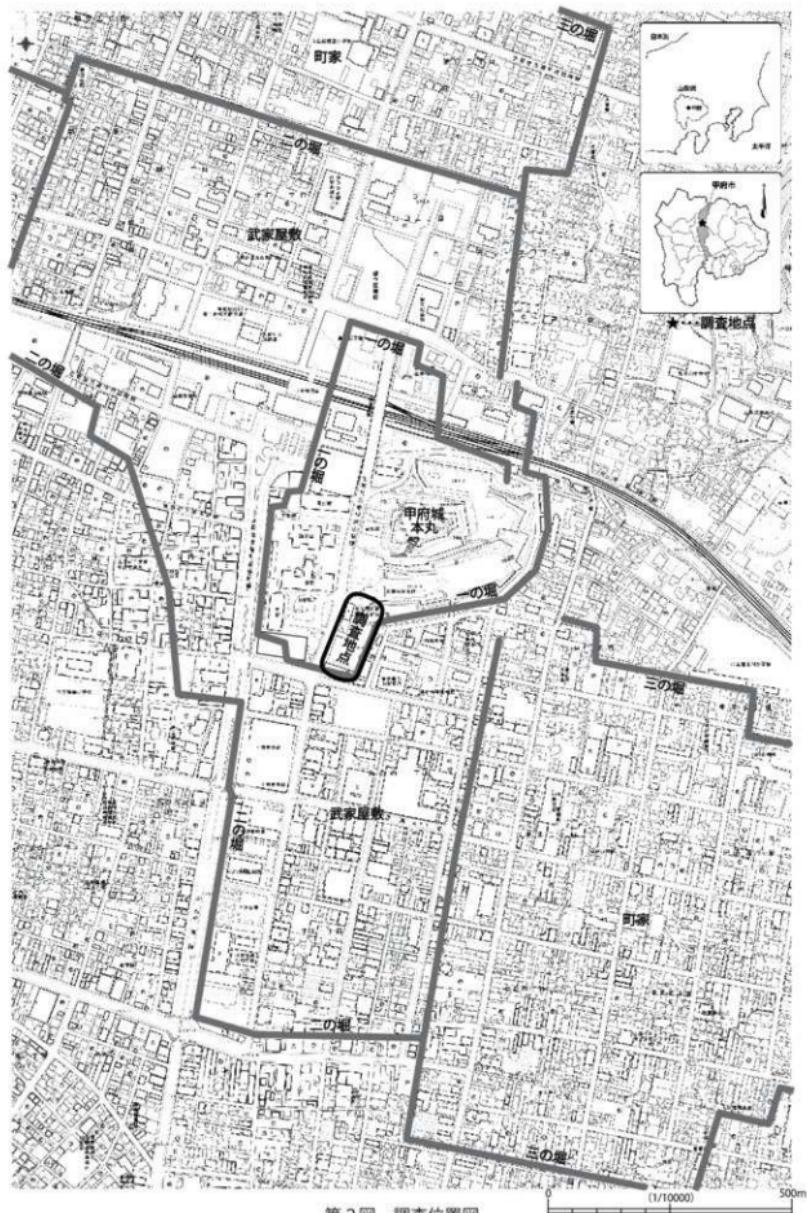
享保9年（1724）、柳沢氏が大和郡山城に転封されると、甲斐国は再び幕府直轄領として幕末に至るまで甲府勤番による支配のもとで管理された。その間、享保12年（1727）に甲府城下で大火が起り、甲府城内の建物も大きな被害を受けたが、大規模な修理や整備等はおこなわれなかった。

明治4年（1871）、明治政府は甲府城を兵部省（後の陸軍省）の管轄下におき、明治10年前後には甲府城内のほぼすべての建物は取り壊されている。明治9年（1876）には甲府城跡のほぼ全城を甲府勤業試験場とし、明治10年（1877）には鍛冶曲輪に葡萄酒醸造所が設置された。また、明治30年代以降は鉄道の敷設等により城郭の規模は次第に縮小されることとなったが、明治37年（1904）に甲府城の主郭部は舞鶴公園となり一般に開放された。

大正6年（1917）、甲府城跡は国から払い下げられ、村松甚蔵の寄付により山梨県有財産となり、大正11年（1922）には甲府城本丸に謝恩碑が建設された。その後、昭和30年代頃までに、甲府城跡の清水曲輪・屋形曲輪・清水曲輪等の西側部分は市街地化によりほぼ姿を消すこととなるが、昭和42年（1967）に山梨県教育委員会の委嘱により甲府城総合学術調査団が組織され、甲府城の学術的な価値と保護に向けた取り組みが強調された『甲府城総合調査報告書』がまとめられ、昭和43年（1968）、舞鶴公園としてわずかに残された主郭部分は県指定史跡として告示された。

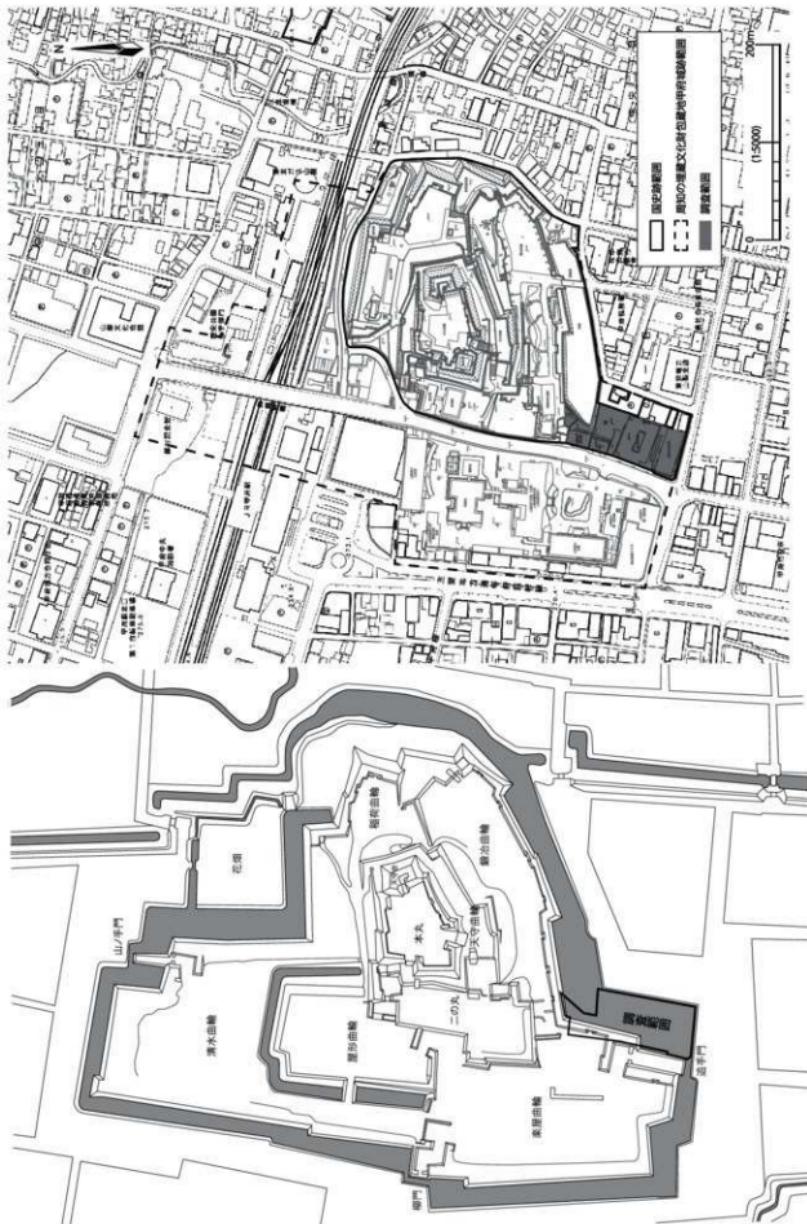
平成2年（1990）から、山梨県土木部（現山梨県土木整備部）による舞鶴公園整備事業によって、石垣の改修工事や園路・広場の整備、鍛冶曲輪門・内松陰門・稲荷曲輪門・稲荷櫓等の歴史的建造物の復元が進められ、平成19年（2007）には甲府による山手門の整備、平成25年（2013年）には山梨県教育委員会による鉄門の復元がおこなわれているなど、歴史景観を整えながら甲府城の価値を高めてきている。また、舞鶴公園内に残る江戸期の石垣を主な対象として、平成17から26までの石垣補修工事、平成26年からの石垣維持管理事業等、歴史的に価値の高い甲府城石垣の保護対策を、山梨県により継続的に実施している。

そうしたなか、甲府城は、築城時の野面積み石垣が良好に現存し、東日本における初期段階の織田・豊臣系の城郭として近世日本の政治・軍事の歴史を知ることができる貴重な城郭であるとされ、平成31年2月に主郭部分や愛宕山石切場跡等を含めた範囲が、国史跡として指定されている。



第2図 調査位置図

第3図 調査範囲図（右）および甲府城全体図（左）



第3章 調査の方法と成果

第1節 確認調査の方法

確認調査は、山梨県民会館跡地および北側に隣接する都市公園舞鶴城公園（県史跡甲府城跡：当時）の一部、約6,000m²の範囲を対象とし、江戸期に描かれた絵図等を参考に9カ所の調査坑（1～9号トレーンチ）を設定した（第4・5図）。

表土は、1から8号トレーンチはバックホウ、9号トレーンチは人力により、遺構上面まで除去をおこなった。また、1号トレーンチ地表下の山梨県民会館公会堂基礎および5・6号トレーンチ地表面のアスファルト舗装は、ブレーカー付きバックホウにより除却した。以下、人力による遺構の掘削・精査をおこない、進捗に応じて測量および写真撮影等の記録作業をおこなった。

測量にあたっては、調査対象範囲内に世界測地形座標に基づく4級基準点および3級水準点を7箇所設置し、平面図は光波測距儀と遺跡管理システム（『遺構くん』）、土層図は方眼紙への計測圖化により記録をおこなった。また、1・7・9号トレーンチで検出された石垣および胴木は、写真測量による記録をおこなった。写真撮影については、デジタル一眼レフカメラ（ニコンD7200・D850）および35mm一眼レフカメラにより撮影した。

埋め戻しは、表土除去時と同様にバックホウおよび人力により発生土を用いておこなったが、1・7号トレーンチにおいて検出した遺構は、以下のとおり養生作業を実施した後、埋め戻した。

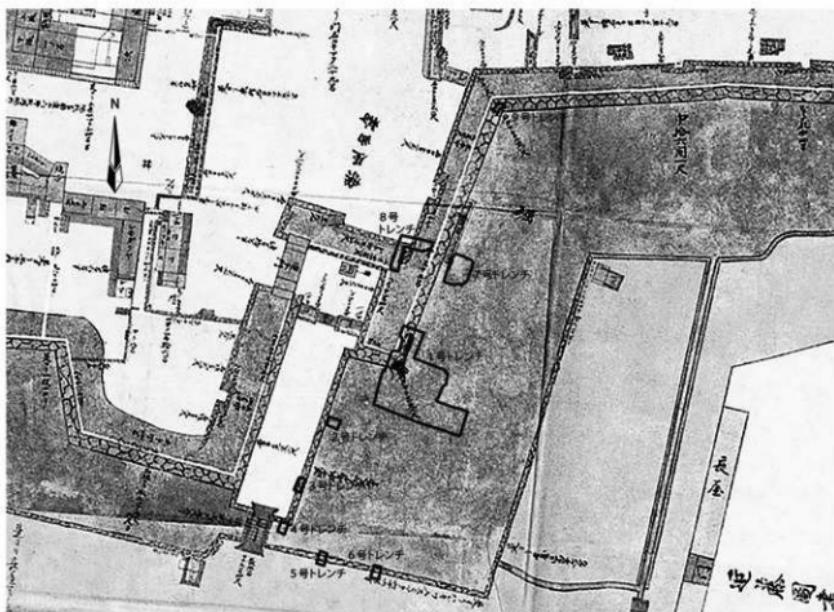
<1号トレーンチ>胴木：スポンジおよびビニールシートで養生後、周囲に土嚢を設置し、山砂にて埋設（※）

石垣：直上に寒冷紗を敷設後、山砂にて埋設（※）

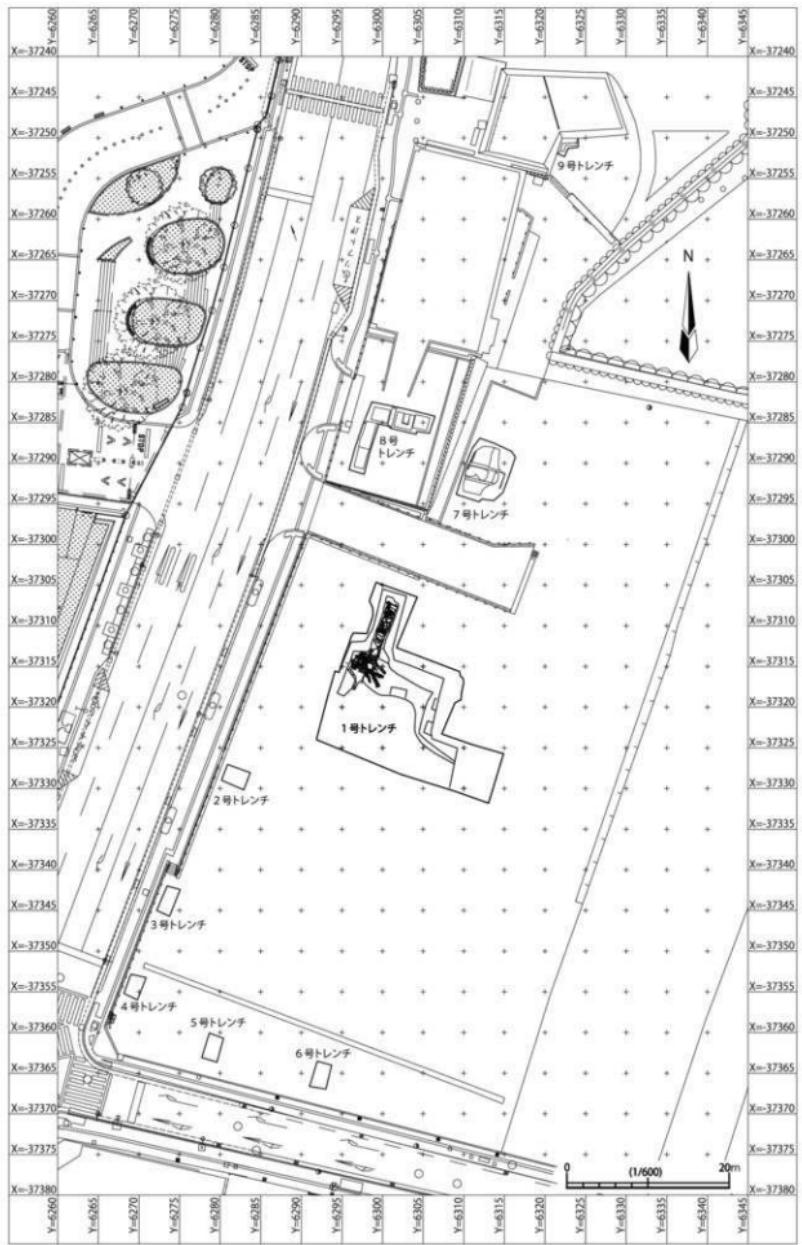
※山砂内に「この下に文化財あり」と記載したシートを敷設

<7号トレーンチ>石垣：周囲に土嚢を設置

また、各作業時には、粉塵対策として、高圧洗浄機による水の散布をおこなった。



第4図 「『樂只堂年録』第173巻附図 甲府城絵図(部分)による調査位置(公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会蔵)



第5図 甲府城跡 山梨県民会館跡地周辺確認調査 全体図

第2節 遺構と遺物

第1項 1号トレント

当該地は、江戸期の絵図においては、甲府城一の堀に面する石垣の出隅が描かれた地点にあたる（第4図）。この石垣は、昭和初期に解体され、以後、山梨県民会館公会堂や山梨県庁東側駐車場として使用されていた。今回の確認調査では、昭和初期の石垣解体以降、詳細が不明のままとなっていた石垣出隅の位置・残存状況等を確認することを目的とした。確認調査により、石垣出隅およびその下部に敷設された胴木、一の堀が確認されている（第6図）。

1. 層序（第8図）

1号トレントの全域において、地表下約0.7mまでの碎石層（1層）下に、山梨県民会館公会堂コンクリート床（2層）および割栗石層（3層）が約0.5mの厚さで堆積する。3層下は、北西部では石垣および石垣裏栗が、それ以外では昭和初期の石垣解体時の堆積層（4層）が約0.65mの厚さで、4層下には一の堀覆土となる黒褐色シルト質土（5層）が約0.4mの厚さで堆積している。また、5層下には一の堀の堀底となる暗褐色シルト質土層（6層）が堆積している。なお、トレント南東部は山梨県民会館公会堂地下室により、4～6層が破壊されている。

2. 石垣（第7～9図、第1表）

トレント北西部において、山梨県民会館公会堂コンクリート床下の地表下約1.2mの地点より、石垣の出隅部を確認した。石垣の規模は、東面石垣は南北約9m、南面石垣は東西約2.1mであり、南面石垣の西側は山梨県民会館公会堂の基礎により破壊されている。いずれも石垣基底部である根石部分のみであり、最大高は約1mである。東面・南面とも、自然石を多用する野面積みであり、出隅部の築石は（石材No E1・S1）には、ノミによる加工痕跡が見られるほか、幅約12cmの矢穴もみられるなど、甲府城築城期の石垣の様相を呈す。なお、南面の石材No S9にも矢穴がみられるが、幅約9cmと狭く、昭和初期の石垣解体時または昭和30年代の山梨県民会館公会堂建設時に穴が穿られたものと考えられる。石垣側面には水平方向の黒色変色帯がみられるが、背面の裏栗上部や近代以降に移動させられた石材にも黒色の変色がおよんでおり、昭和初期の石垣解体以降、土中に埋もれているなかで変色したものと考えられる。

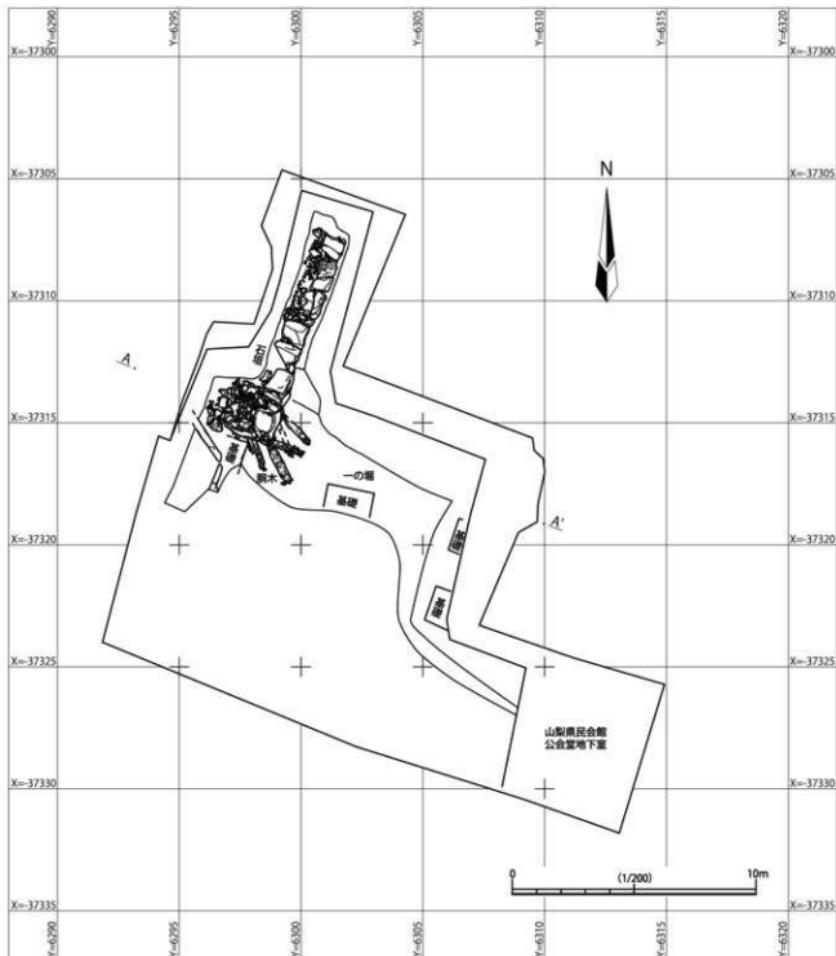
第1表 1号トレント石垣石材観察表

＜東面＞

石材No	種別	石材	傾斜角	変状	備考
E1	築石	安山岩	78°		ノミ加工痕、幅約12cmの矢穴
E2	詰石	安山岩			
E3	詰石	安山岩			
E4	詰石	安山岩			
E5	築石	安山岩	71°		
E6	詰石	安山岩			
E7	築石	安山岩	67°		
E8	-	安山岩			
E9	詰石	安山岩			
E10	築石	安山岩		削れ	
E11	築石	安山岩			
E12	詰石	安山岩			
E13	築石	安山岩		削れ	
E14	築石	安山岩			
E15	築石	安山岩			
E16	築石	安山岩			

＜南面＞

石材No	種別	石材	傾斜角	変状	備考
S1	築石	安山岩	65°		ノミ加工痕
S2	詰石	安山岩			
S3	詰石	安山岩			
S4	詰石	安山岩			
S5	詰石	安山岩			
S6	詰石	安山岩			
S7	築石	安山岩			
S8	築石	安山岩	66°		
S9	-	安山岩		近代以降移動	幅約9cmの矢穴
S10	-	安山岩		近代以降移動	
S11	-	安山岩		近代以降移動	
S12	-	安山岩		近代以降移動	
S13	-	安山岩		近代以降移動	



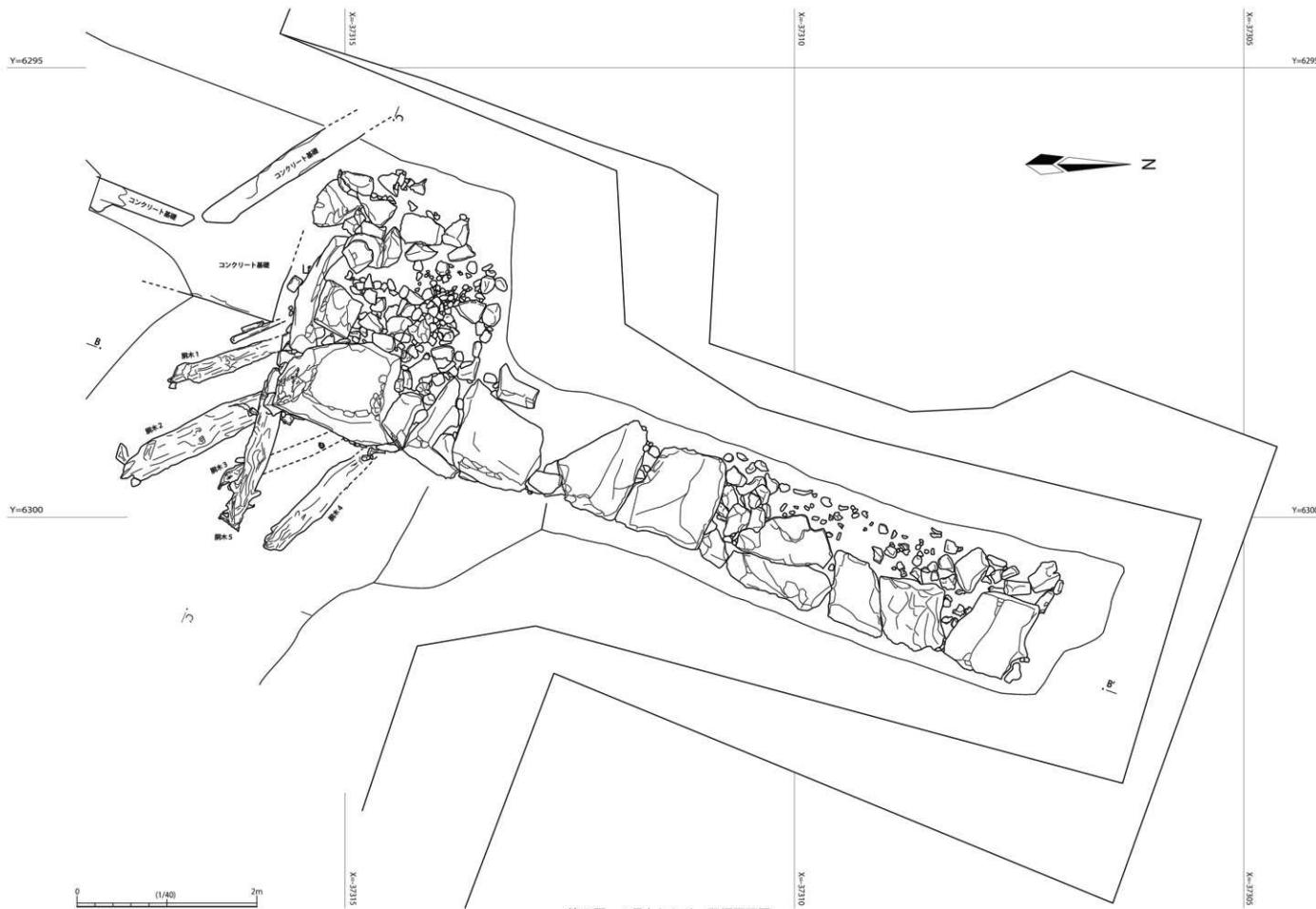
第6図 1号トレンチ全体図

3. 樹木（第7～9図）

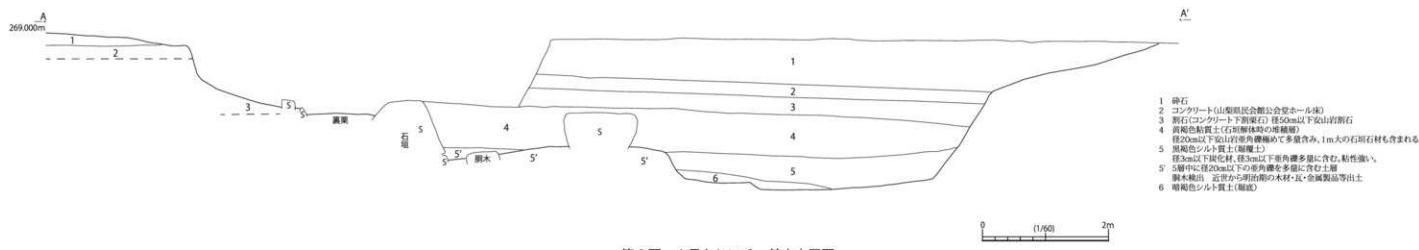
石垣下、地表下約1.3mより計5本の樹木が検出された（樹木1～5）。樹種はいずれもマツであり、いずれも石垣下に伸びているため全長は不明であるが、太さは20～40cmである。

樹木1～4は石垣に対し斜め方向に配置し、樹木1～3の上に樹木5を南面石垣と平行方向に配置している。樹木2・3・4にはホゾ穴が穿たれ、さらにホゾ穴内には木杭が打ち込まれている。樹木2に打ち込まれた木杭は、樹木5との交差部分にある。

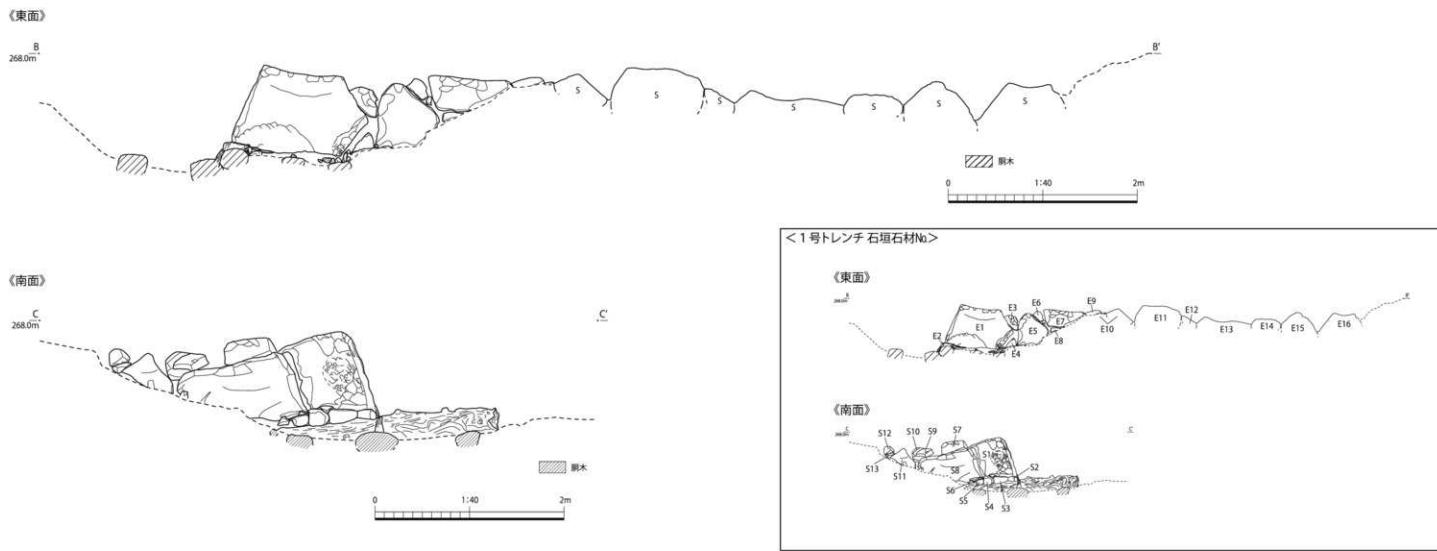
樹木の周囲には径20cm以下の亜円礫が多く見られる（第8図1号トレンチ基本土層5'層）。この礫中には昭和初期の石垣解体時に堆積したものも含まれていると思われるが、礫が樹木下に存在する状況も散見できること



第7図 1号トレンチ 石垣平面図



第8図 1号トレンチ 基本土層図



第9図 1号トレンチ 石垣立面図

から、石垣・胴木の沈下防止のために敷設された可能性がある。なお、胴木1北側に胴木1と平行する竹材がみられるが、これはその北側にある山梨県民会館公会堂基礎に伴うものである。

4. 一の堀（第6・8図）

1号トレンチにおいては北西部の石垣を除いた範囲が一の堀にあたるが、今回の調査は小規模なものとなるため、掘幅等の全体規模は依然不明である。今回の調査範囲においては、一の堀底面となる6層上面は東に向かい傾斜し、確認された最大深度は、地表下約2.35 mとなる。なお、トレンチ南東部は山梨県民会館公会堂地下室建設により破壊がおよび一の堀の痕跡は残っていない。

5. 遺物（第10・11図、第2～6表）

1号トレンチにおいて出土した遺物は、一の堀内の胴木付近に集中して出土している。1は古墳時代の甕片であり、外面には赤彩が施されている。2は土瓶の蓋であり、赤みを帯びた胎土で外面に緑色の釉薬が施される。明治期の資料と考えられる。なお、陶器類にはほかに明治から昭和期の資料が出土しているがいずれも小破片のため図示していない。3～6は瓦であり、3～5は平瓦、6は丸瓦である。7は鉄製の鎌、8は明治15年鋸造二銭硬貨、9～11は半銭硬貨でいずれも明治期鋸造のものである。12・13は板材、14は加工木片であり、いずれも鋸による切断痕がみられる。なお、木製品については、ほかに回転鋸による切断痕をもつ木材が多数みられる。

第2表 1号トレンチ陶磁器・土器観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	高さ				
1	第10図	5	H30.27.3.2 1T 石垣脇塀内 H30.5.29	土器	甕	-	-	(3.9)	外：5YR4/4 に赤褐色 内：7.5YR6/4 に赤褐色	白色粒子・黒色粒子・ 雲母	良	外面赤彩 内面横位ヘラナデ
2	第10図	6	H30.27.3.2 1T 石垣脇塀内 H30.5.31	陶器	土瓶(蓋)	9.0	2.0	2.7	外：7.5Y5/3 灰オーリープ 内：10YR6/6 明黄褐色	密	良	外面緑釉

第3表 1号トレンチ瓦観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	器種	法量(cm)			特徴	色調	胎土	備考
						長さ	幅	厚さ				
3	第10図	1	H30.27.3.2 1T 塀内 H30.5.25	瓦	平瓦	(19.8)	(16.1)	2.0	-	表面：7.5Y5/1 灰色 断面：7.5V7/1 灰白色	白色粒子・雲母	
4	第10図	2	H30.27.3.2 1T 塀 H30.6.7	瓦	平瓦	(11.6)	(15.1)	1.9	-	表面：N3/0 暗灰色 断面：7.5V5/1 灰色	白色粒子	孔あり
5	第10図	3	H30.27.3.2 1T 石垣脇塀内 H30.5.29	瓦	平瓦	(18.3)	(8.7)	2.1	-	表面：2.5Y3/1 黒褐色 断面：5Y5/1 灰色	白色粒子	
6	第10図	4	H30.27.3.2 1T 北側石垣上 H30.6.1	瓦	丸瓦	(10.4)	(7.9)	2.2	-	表面：10Y7/1 灰白色 断面：10Y6/1 灰色	白色粒子・雲母	外面：ヘラ調整 内面：ヘラ調整・布目

第4表 1号トレンチ金属製品観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	素材	種別	寸法(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	厚さ		
7	第10図	7	H30.27.3.2 1T 石垣脇塀内 H30.5.29	鉄	鎌	10.7	(11.1)	0.4	40.9	



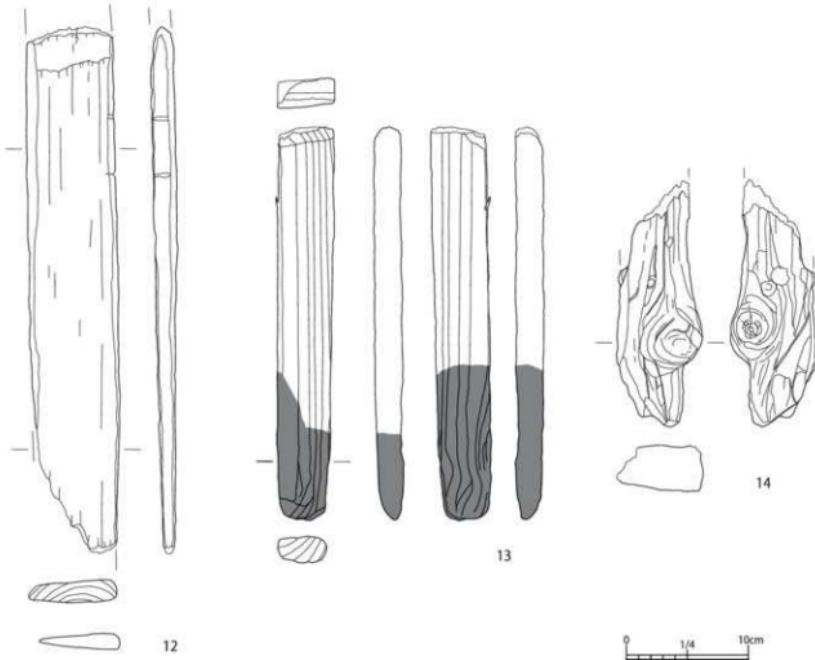
第10図 1号トレンチ出土遺物（1）

第5表 1号トレンチ銭貨観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	鋳造年	寸法(cm)		重量(g)	備考
						直径	厚さ		
8	第10図	8	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.31	二銭	明治十五年	3.1	0.2	13.1	
9	第10図	9	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.28	半銭	明治十九年	2.2	0.1	3.1	
10	第10図	10	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.28	半銭	明治二十年	2.2	0.1	3.1	
11	第10図	11	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.31	半銭	明治八年	2.2	0.1	3.2	

第6表 1号トレンチ木製品観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	寸法(cm)			備考
					最大長	最大幅	厚さ	
12	第11図	木1	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.29	板材	43.5	7.6	2.2	鋸による切断痕
13	第11図	木2	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.29	板材	32.3	4.6	2.3	鋸による切断痕、下部に焦げ
14	第11図	木3	H30.ガラス 1T石垣脇 堀内 H30.5.29	加工木片	20.1	7.1	3.7	鋸による切断痕



第11図 1号トレンチ出土遺物（2）

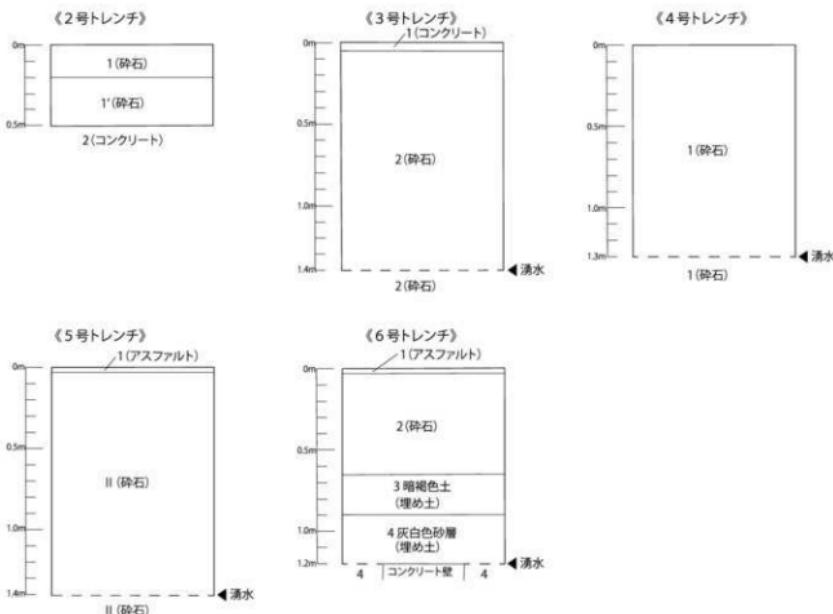
第2項 2～6号トレンチ

当該地は、江戸期の絵図においては、それぞれ、甲府城一の堀に面する石垣が描かれた地点にあたる（第4図）。この石垣はいずれも昭和初期に解体、また、一の堀も埋め立てられ、以後、北側は山梨県民会館公会堂や山梨県庁東側駐車場、南側は山梨県民会館として使用されていた。今回の確認調査では、昭和初期の石垣解体以降、詳細が不明のままとなっていた石垣の位置・残存状況等を確認することとした。

確認調査により、2号トレンチでは地表下約0.5mの地点で山梨県民会館公会堂の基礎コンクリートを確認し、3～6号トレンチにおいては、山梨県民会館基礎撤去後の埋土層である碎石を地表下1.1～1.4mまで掘削したところ、著しい湧水を確認した（第12図）。

それ以上の掘削は各トレンチに隣接する歩道等に何らかの影響を及ぼすおそれがあることから、掘削を断念し、発生土にて埋め戻しをおこなった。

以上のことから、2～6号トレンチにおいては、甲府城の閉する遺構や遺物は確認されていない。



第12図 2～6号トレンチ土層模式図 (S=1/30)

第3項 7号トレント

7号トレントは、江戸期の絵図においては、甲府城一の堀に面する腰石垣が描かれた地点にあたり（第4図）、7号トレントの西側には、この腰石垣が接続していた石垣が現存している。昭和初期に一の堀が埋立てられて以後、この腰石垣の詳細は不明となっており、位置・残存状況等を把握すること目的に確認調査を実施した。

1. 層序（第14図）

7号トレントの全域において、地表下約0.5～0.7mまで碎石層（1・2層）が堆積するが、その下部は、トレント中央部においては、東西方向に伸びる2つのコンクリート基礎が、地表下約0.65mの深さにある（第13図）。このコンクリート基礎は、昭和30年代以降にトレント東側に建てられていた舞鶴会館に付属する施設の基礎と思われるが、平面図等の詳細記録は残っておらず構築時期やどの建物のものであるか等の詳細は不明である。この2つのコンクリート基礎の東西部は、トレント東西端に南北方向のコンクリート基礎があり、東西南北のコンクリート基礎に囲まれた小部屋状になっている。

1・2層下の土層は、コンクリート基礎を境に堆積状況が異なる。コンクリート基礎以北は、2層下にコンクリート破片を含む黒褐色砂質土層（6層）が堆積し、6層下において腰石垣が構築されている。腰石垣の北側は腰石垣が取り崩されており、その部分および腰石垣の前面には、石垣を構成していたと思われる安山岩の削石層（7層）が堆積する。

コンクリート基礎以南は、褐色砂質土層（3層）、暗褐色粘質土層（4層）、黄褐色粘質土層（5層）が堆積する。前述したコンクリート基礎は、5層直下に構築され、小部屋状の空間内にはタイル片等を含む暗褐色土層が堆積し、その下部は、コンクリート基礎下約0.6mの地点で、土間コンクリートが敷設されている。土間直下には、コンクリート基礎北側でみられた安山岩削石を主体的に含む黒褐色砂質土層（8層）が堆積している。この8層は、安山岩削石層（7層）中にその上層（6層）の土が混入したものと考えられる。また、8層下には、甲府城一の堀内の堆積土である黒色シルト質土層（9層）が堆積する。なお、小部屋状空間部分においては、腰石垣は9層上面より上部に構築され、腰石垣上部はコンクリート基礎が接続されている。

2. 腰石垣（第13・14図、第7表）

トレント西壁において、地表下約0.9～1.2mの地点より腰石垣を確認した。1.層序において前述したコンクリート基礎による小部屋状の空間内に隅角部があり、北側は昭和初期以降に解体されたと思われる。残存する規模は、最大高約0.95m、南北約2.3mであり、根石を含め最大2段の築石が積まれている。自然石を多用する野面積みであり、甲府城築城期の様相を呈す。根石直下には、胴木は確認されていない。

この腰石垣は7号トレント西側に現存する江戸期の石垣に接続するものと思われるが、コンクリート基礎が接続されている為、接続状況等は不明である。

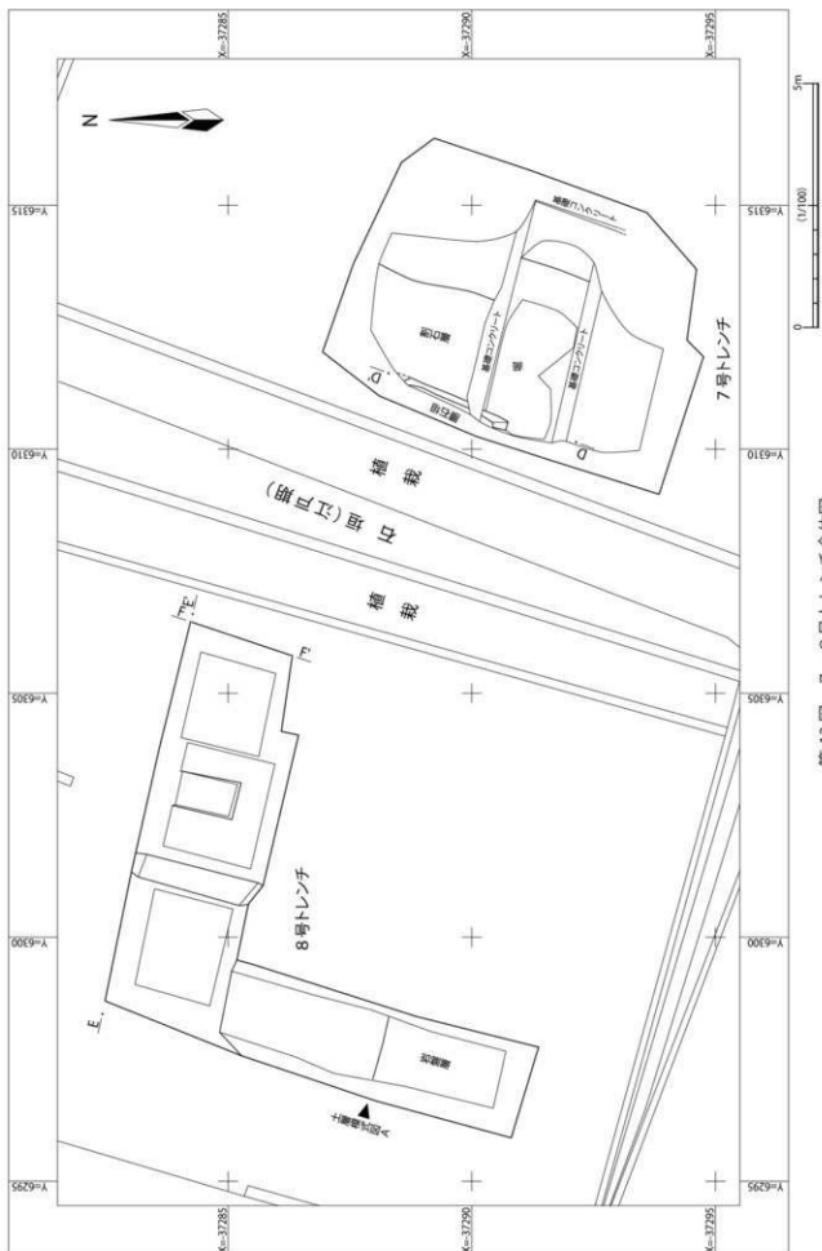
また、石垣側面には、1号トレントと同様に水平方向の黒色変色帯がみられるが、今回の調査範囲が狭小であり、また、コンクリート基礎等により観察範囲が狭められていることなどから、変色の原因は今回の調査では説明できていない。

第7表 7号トレント石垣石材観察表

石材No.	種別	石材	傾斜角	変状	備考
E1	礫石	安山岩	87°		南面傾斜角：66° 基礎コンクリート付着
E2	礫石	安山岩	86°		南面傾斜角：71° 基礎コンクリート付着
E3	礫石	安山岩	86°		基礎コンクリート付着
E4	礫石	安山岩	85°		
E5	礫石	安山岩	84°		
E6	礫石	安山岩			

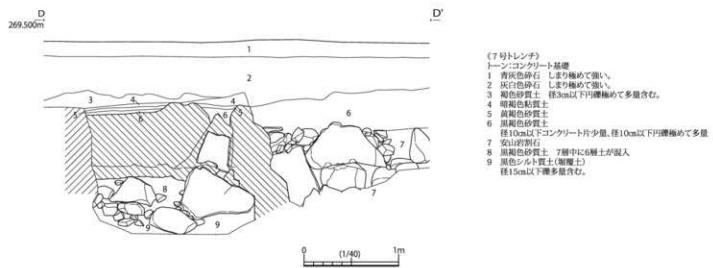
3. 遺物（第15図、第8・9表）

1・2は近世から幕末にかけての磁器であり、1は皿、2は小碗である。陶磁器類にはほかに明治～昭和期の資料が出土しているがいずれも小破片のため図示していない。3・4は瓦であり、3は丸瓦、4は軒丸瓦である。7号トレントにおいて出土した遺物は、いずれも腰石垣のすぐ脇より集中して出土している。

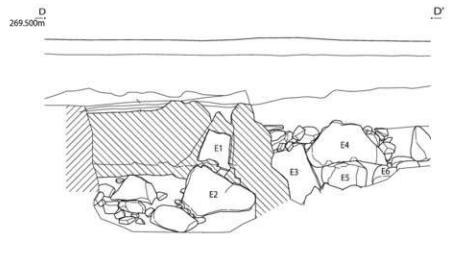


第13図 7・8号トレンチ全体図

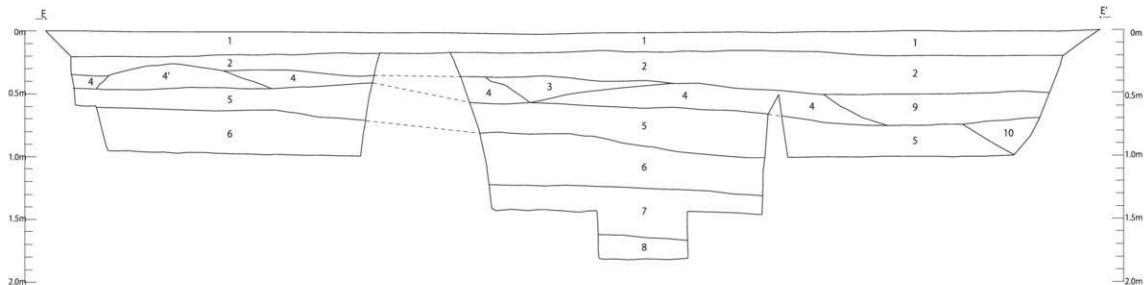
<7号トレンチ 石垣立面図>



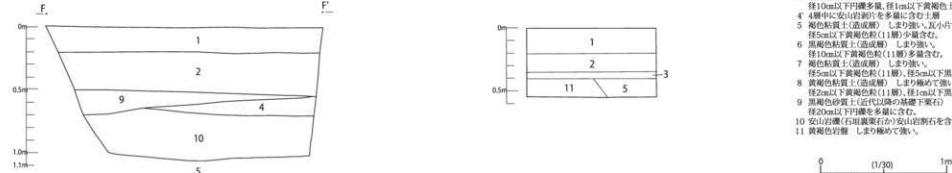
<7号トレンチ 石垣石材No>



<8号トレンチ 北面土層図>



<8号トレンチ 東面土層図>



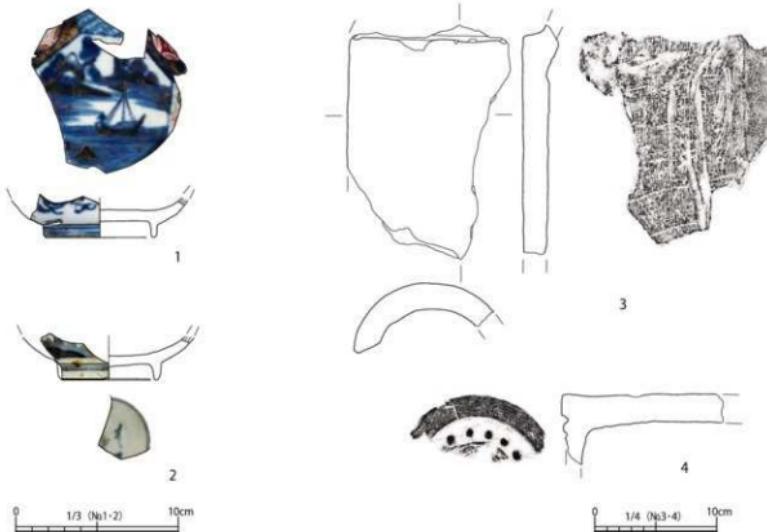
第14図 7号トレンチ石垣立面図・8号トレンチ土層図

第8表 7号トレンチ陶磁器・土器観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高				
1	第15図	14	H30 カラマガラ 7T 石垣脇 H30.9.18	磁器	皿	-	6.6	(2.4)	10Y8/1 灰白色	密	良	染付、透明釉 底部：重ね焼き痕
2	第15図	15	H30 カラマガラ 7T 石垣脇 H30.9.18	磁器	小碗	-	(5.8)	(2.7)	5GY8/1 灰白色	密	良	染付、透明釉 底部：重ね焼き痕

第9表 7号トレンチ瓦観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種別	器種	法量(cm)			特徴	色調	胎土	備考
						長さ	幅	厚さ				
3	第15図	12	H30 カラマガラ 7T 石垣脇石材ガラ脇内 H30.9.13	瓦	丸瓦	(19.2)	(13.4)	2.9	-	表面:5Y4/1 灰色 断面:5Y6/2 灰オリーブ色	白色粒子・ 黒色粒子	外:ヘラ調整 内:布目、ヘラ調整
4	第15図	13	H30 カラマガラ 7T 石垣脇石材ガラ脇内 H30.10.2	瓦	軒丸瓦	(5.8)	(13.3)	2.3	-	(5) 表面:10YR5/6 黄褐色 断面:10YR6/4 にふい黄褐色	白色粒子・ 黒色粒子・ 雲母	内:布目、ヘラ調整



第15図 7号トレンチ出土遺物

第4項 8号トレント

8号トレントは、江戸期の絵図においては、7号トレントの西側に現存する江戸期の石垣の背面石垣や石階段が描かれた地点にあたる（第4図）。昭和初期に石垣や階段が解体されて以降、山梨県庁東別館や山梨県庁東側駐車場として使用されていた。今回の確認調査では、詳細が不明のままとなっていた石垣や階段等の甲府城に関する遺構の位置・残存状況等を確認すること目的とした。

1. 層序（第14図）

8号トレントの全域において、地表下約0.25～0.5mまで碎石層（1・2層）が堆積している。トレント南西部においては、2層下にコンクリート片を多量に含む黒褐色砂質土層（3層）が約5cmの厚さで、3層下部には黄褐色の岩盤層（11層）が地表下約0.4mの深さより堆積している（第14図8号トレント南西部土層模式図A）。

岩盤層（11層）以北では、トレント南西部においてみられた3層は部分的に堆積するのみであり、1・2層（碎石層）下には暗褐色粘質土層（4層）が主体的に堆積し、また、トレント北西部には4層中に安山岩剥片を多量に含む4'層、北東部には近代以降の基礎下栗石と考えられる円礎を多量に含む黒褐色砂質土層（9層）が部分的に堆積している。4層下には、造成層とみられるしまりの強い土層（5～8層）が地表下1.8m以上堆積しているが、トレント東端部では、割石を含む安山岩層（10層）が造成土層確認面よりもめられる。この10層は、東側に現存する江戸期の石垣より約3mの地点にあり、石垣裏栗の可能性もあるが、裏栗に用いられることが少ない割石も含まれており、その性格付けにはさらなる検証が必要である。

2. 造成層（第14図）

前述したとおり、8号トレント付近は江戸期の絵図においては、甲府城一の堀に面する石垣の背面石垣や石階段が描かれた地点にあたるが、今回の確認調査により、背面石垣や石階段は解体され、トレント南西部では、岩盤層まで削平され、また、岩盤層より北側のトレント中央部より北側の範囲では、岩盤層確認面より造成層（5～8層）が堆積している状況も確認された。

この造成層は地表下1.8m以上堆積し、また、今回の調査で確認できた4つの造成層はいずれも東側の堀に向かって緩やかに低くなるような傾斜をもつ。トレント東側の甲府城築城期の石垣構築時に造成された可能性もあるが、最上部の5層中からは江戸期と思われる瓦の小破片が出土するなど、具体的な造成時期についてはさらなる検証が必要である。

第5項 9号トレント

9号トレントは、甲府城一の堀に面する石垣の入隅部前面にあたり、昭和30年頃、一の堀を約5m埋め立て公園園路とした範囲の植栽帯にある（第16図）。平成5・6年度に円路面より上部の石垣の解体・積み直しをおこなっているが、円路面より下部に残る江戸期の石垣との取り付け状況等は不明確であることから、確認調査を実施した。

1. 層序

地表下0.4mまでは植栽帯腐植土層が堆積し、その下部には、昭和30年頃の埋め土層である褐色土層が地表下1m以上堆積している。また、トレント西面および北面には江戸期の石垣が構築されている（第17図）。

2. 石垣（第17～19図、第10表）

9号トレント西面および北面において、地表面または地表下約0.3m以下に江戸期の石垣を確認した。いずれも自然石を多用する野面積みで積まれており、甲府城築城期の様相を呈している。

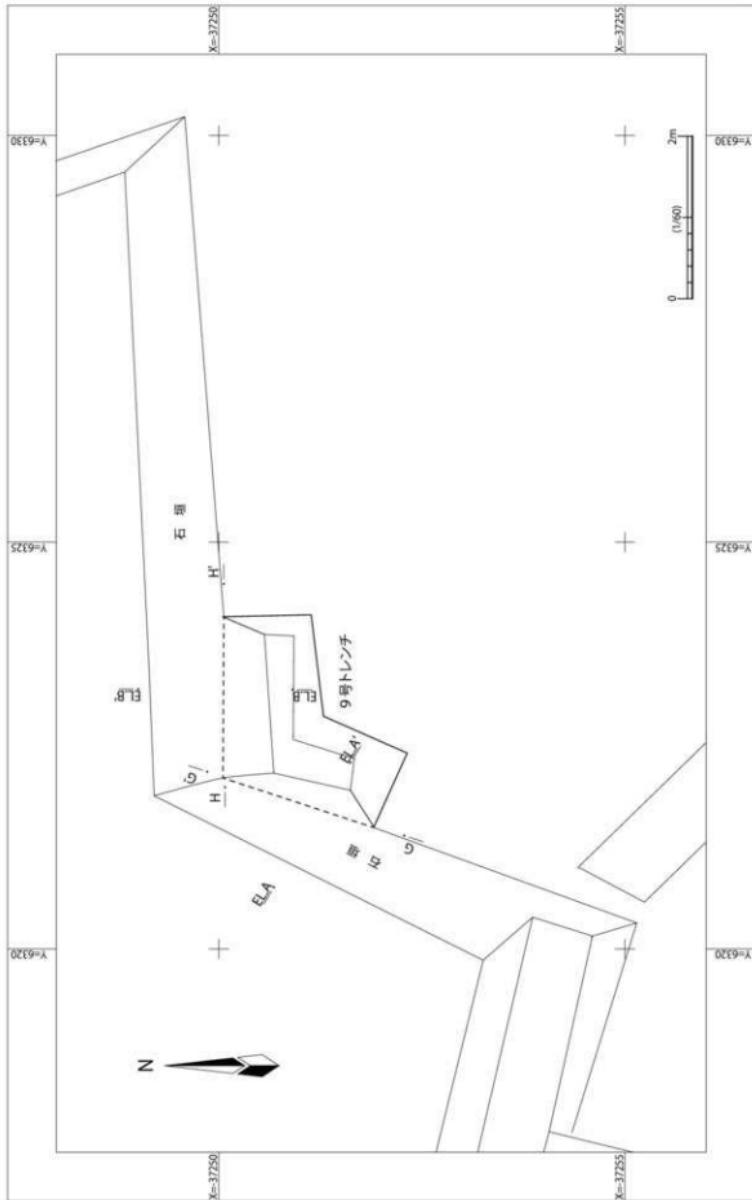
江戸期の石垣は、西面・北面ともに、詰め石が欠落している状況であり（第19図欠落状況）、特に北面石垣においては、一部の築石（石材No N4・N5）が、詰め石の欠落により本来ある位置からずれ落ちている可能性がある。また、北面石垣においては、築石にクラックや割れがみとめられており、今後、タマネギ状剥離が発生する可能性もある。

平成5年以降の整備石垣（以下「平成石垣」という。）と江戸期の石垣の取り付け状況については、北面石垣では、築石の傾斜角等、特に問題点は認められない。しかし、西面石垣では、築石の傾斜角が、江戸期の石垣が67～77°であるのに対し、平成石垣は75～83°となっており、平成石垣部分に孕み出しがみられる（第18図）。

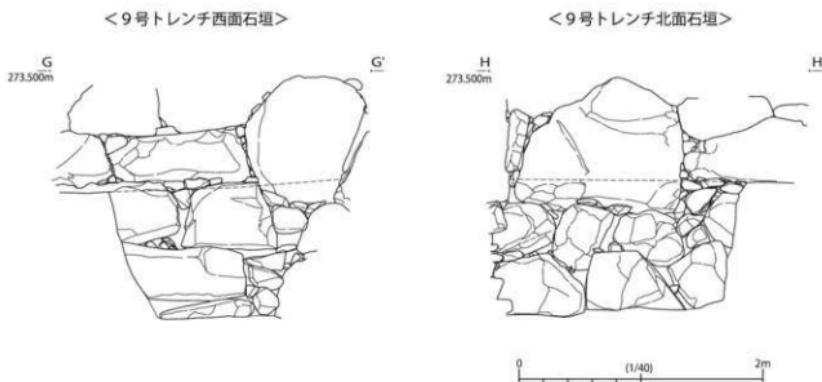
第10表 9号トレント石垣石材観察表

<西面石垣>					
石材No	種別	石材	傾斜角	変状	備考
W1	築石	安山岩			
W2	詰石	安山岩			
W3	築石	安山岩	74°		
W4	詰石	安山岩			
W5	詰石	安山岩			
W6	築石	安山岩	77°		
W7	詰石	安山岩			
W8	詰石	安山岩	67°		
W9	築石	安山岩	73°		
W10	築石	安山岩		平成整備時改修	
W11	築石	安山岩	75°		平成整備時改修
W12	築石	安山岩	83°		平成整備時改修
W13	築石	安山岩	79°		平成整備時改修
W14	築石	安山岩	81°		平成整備時改修

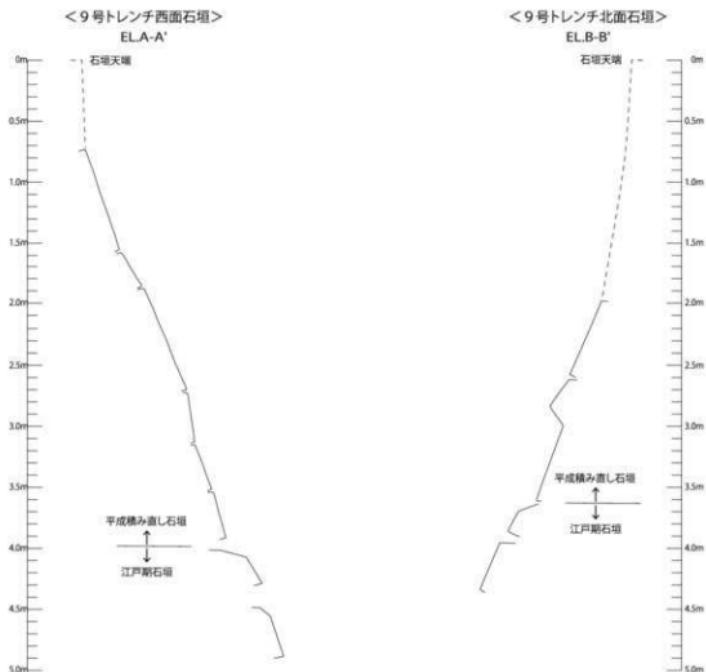
<北面石垣>					
石材No	種別	石材	傾斜角	変状	備考
N1	築石	安山岩	73°	クラック	
N2	築石	安山岩	67°		
N3	築石	安山岩	73°		
N4	築石	安山岩	68°	ずれ	
N5	築石	安山岩	67°	ずれ	
N6	築石	安山岩	65°	クラック	
N7	詰石	安山岩		割れ	
N8	詰石	安山岩			
N9	築石	安山岩	70°		
N10	詰石	安山岩			平成整備時改修
N11	築石	安山岩			平成整備時改修
N12	詰石	安山岩			平成整備時改修
N13	築石	安山岩	73°		平成整備時改修
N14	築石	安山岩	69°		平成整備時改修
N15	築石	安山岩			平成整備時改修



第16図 9号トレンチ全体図

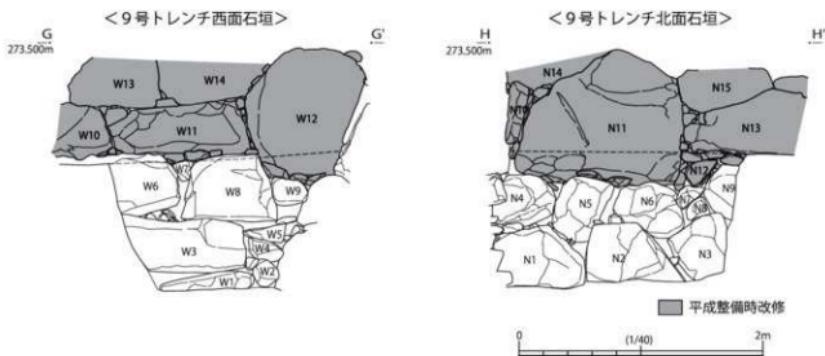


第 17 図 9号トレンチ石垣立面図

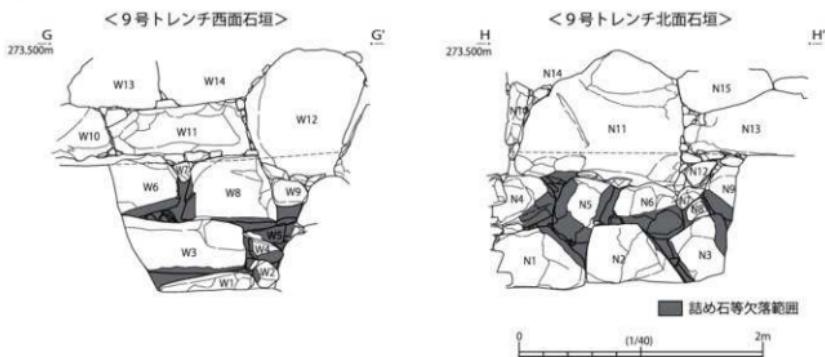


第 18 図 9号トレンチ石垣横断面図

改修状況



欠落状況



第19図 9号トレンチ 石垣改修・欠落状況図

第4章 総括

第1節 8号トレンチ検出の造成層について

今回の確認調査では、調査対象範囲南側に設定した2～6号トレンチをのぞき、甲府城跡に関係すると考えられる遺構が確認されており、1号トレンチでは甲府城追手門の東側に存在した一の堀に面した石垣の出隅部の根石が、7号トレンチでは、1号トレンチで確認した石垣に接続される腰石垣が確認され、いずれも甲府城築城期に築かれた野面積み石垣と推定される。また、9号トレンチにおいては平成5・6年度に解体修理をおこなった石垣の下部に甲府城築城期の石垣が残存している状況が確認された。

8号トレンチでは、甲府城一の堀に面する石垣の背面石垣や石階段の存在が推定された。しかし、それらは全て解体されており、トレンチ南西部では岩盤層が地表下約0.4mより堆積し、岩盤層以北では造成層が地表下1.8m以上まで堆積している状況であった。造成層中には岩盤腐粒が混在し、また、突き固めたかのようにしまりが強いものであるため、自然の要因による堆積ではなく、人為的に堆積させたものと考える。8号トレンチの北側約40mの地点にある鍛治曲輪門周辺石垣の解体修理に伴う発掘調査（平成5年度）では、石垣根石が岩盤上に据えられている状況が確認されている。これらの状況から推定すると、8号トレンチ南西部の岩盤から、北限は不明なもの、鍛治曲輪門の南側までの間に、かつて谷状地形が存在しており（第20図）、その谷状地形を埋めるために造成層が構築されたものと思われる。

造成層の構築時期については、造成層最上部の5層中からは江戸期と思われる瓦の小破片が出土しており、5層については、甲府城築城後、江戸期の石垣改修時に造成された可能性がある。5層以下の造成層（6～8層）からは出土品はみられないが、8号トレンチ西側の石垣が甲府城築城期の様相を呈している状況を踏まえると、甲府城築城後の改修時に造成された可能性は考えにくく、甲府城築城期の石垣構築時にあわせて造成された可能性がある。また、前述の鍛治曲輪門周辺石垣の解体修理に伴う発掘調査報告書では、中世の石造物の出土が甲府城の西側に集中していることから、甲府城築城に伴い現在の甲府市太田町に移転した一蓮寺の中世段階における位置を甲府城の西側に想定しており、一蓮寺の造営など、甲府城築城以前に造成された可能性もある。いずれの可能性についても、今回の確認調査では明確な手がかりを得ることができておらず、造成層の構築時期の検討についてはさらなる調査が必要となる。

参考文献

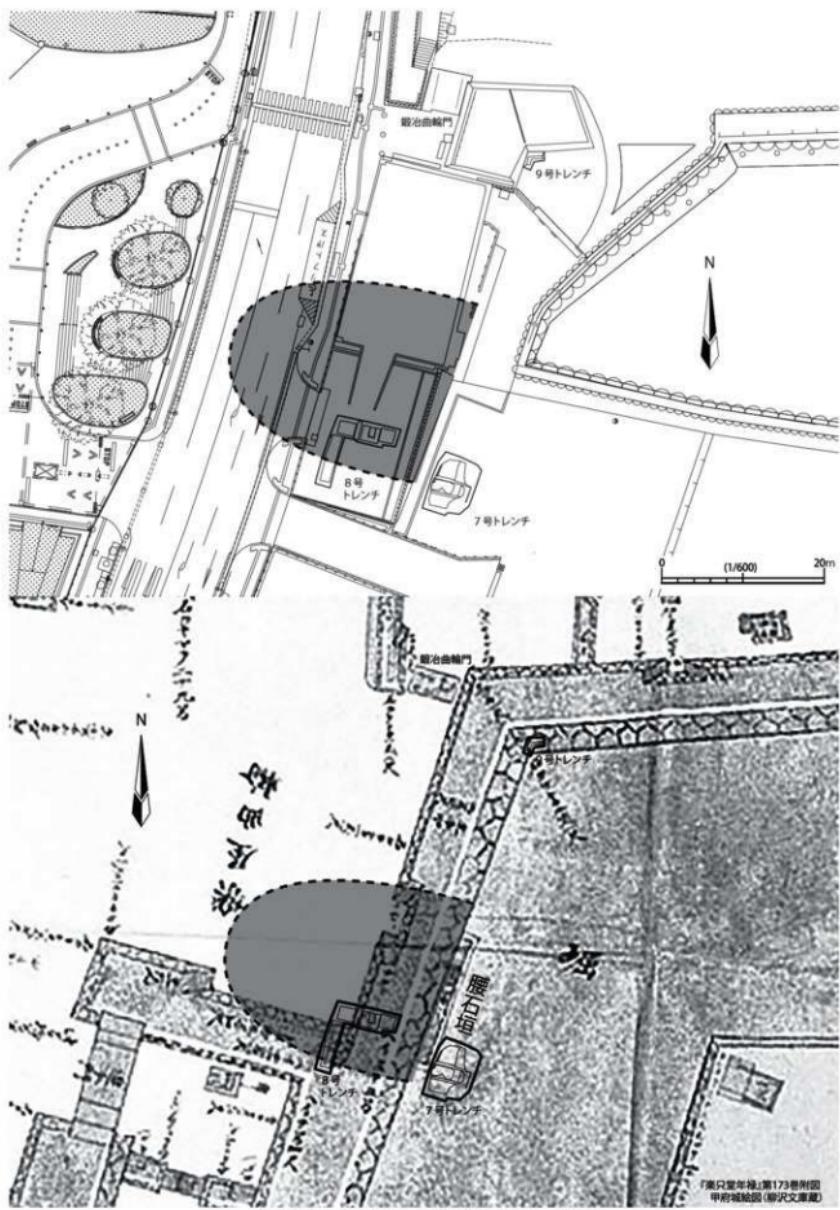
- ・山梨県教育委員会・山梨県土木部 1995『山梨県指定史跡甲府城跡V』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第98集

第2節 7号トレンチ検出の腰石垣と8号トレンチ検出の造成層の関係性について

8号トレンチ検出の造成層と他の遺構との関連性については、造成時期は現段階で不明確ではあるが、8号トレンチ西側の甲府城築城期の様相を呈する石垣の背面盛り土としての機能を有している。また、7号トレンチで確認された腰石垣と造成層ではその南端部がほぼ一致しており（第20図）、なんらかの関連性が想定される。平成2・3年度に実施された地中レーダー探査結果では、甲府城鍛治曲輪南側の一の堀に面する石垣付近における沢・凹地状の地形の存在をしめすとともに、「沢状地形の底部に見られる砂・粘土の混合するシルト質土は、流动化しやすい地盤と考えられる。石垣の崩壊については、特異な雨の状況ではそれらのシルト質土が滑ったことも一要因として考慮する必要がある」という見解がしめされている（山梨県教育委員会・山梨県土木部 1992）。平成2・3年度に実施された地中レーダー探査結果による見解を踏まえると、8号トレンチの調査により存在が推定された旧谷状地形においても同様の状況化において石垣の変状が発生することも考えられ、7号トレンチ検出の腰石垣は、石垣の変状を防止するために、旧谷状遺構の前面に構築されたとも考えられる。

参考文献

- ・山梨県教育委員会・山梨県土木部 1992『山梨県指定史跡甲府城跡II』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第74集



第20図 甲府城跡 旧谷状地形イメージ図

写真図版 1



1号トレーニング調査前 南東から



1号トレーニング土層堆積状況 南から



1号トレーニング石垣 南東から



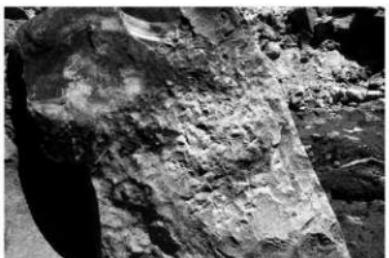
1号トレーニング石垣 東から



1号トレーニング石垣南面 南から



1号トレーニング石垣東面 東から

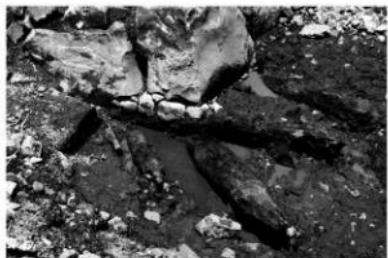


1号トレーニング石垣隅角部のノミ加工痕



1号トレーニング石垣隅角部の矢穴

写真図版 2



1号トレンチ胴木 南から



1号トレンチ胴木木杭 南から



1号トレンチ胴木保護状況 南東から



1号トレンチ石垣山砂による保護状況 北東から



2号トレンチ 北から



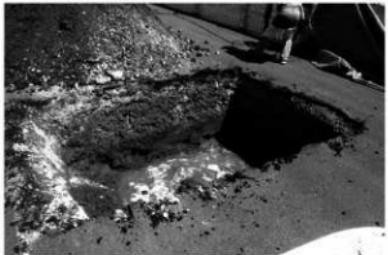
3号トレンチ 北から



4号トレンチ 北から



5号トレンチ 東から



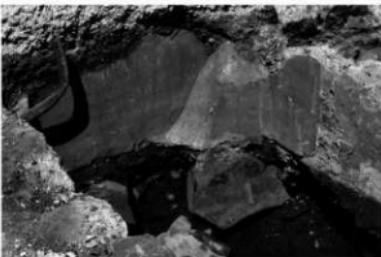
6号トレーンチ 西から



7号トレーンチ 東から



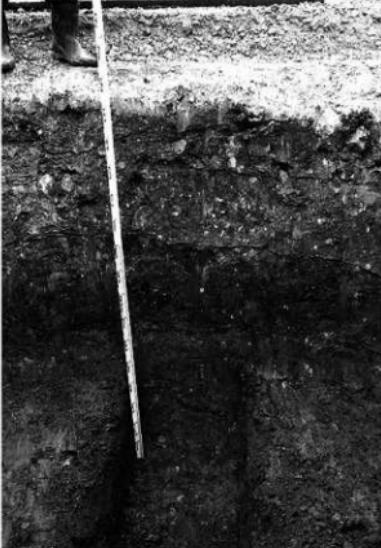
7号トレーンチ腰石垣 東から



7号トレーンチ腰石垣隅角部 南東から



8号トレーンチ南西部岩盤 南西から



8号トレーンチ東面土層堆積状況 西から

8号トレーンチ北面土層堆積状況 南から

写真図版 4



9号トレンチ調査前 南東から



9号トレンチ 南東から



9号トレンチ西面石垣（遠景） 東から



9号トレンチ北面石垣（遠景） 南から



9号トレンチ西面石垣 東から



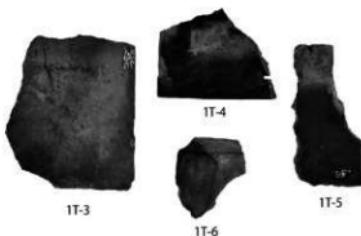
9号トレンチ北面石垣 南から



IT-1



IT-2



IT-3

IT-4



IT-5

IT-6

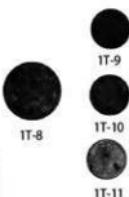


1号トレンチ出土土器・陶器

1号トレンチ出土瓦



IT-7



IT-8

IT-9

IT-10

IT-11

1号トレンチ出土金属製品



IT-12



IT-13



IT-14

1号トレンチ出土木製品

1号トレンチ出土木製品



7T-1



7T-2

7号トレンチ出土磁器



7T-3



7T-4

7号トレンチ出土瓦

報告書抄録

ふりがな	こうふじょうあと							
書名	甲府城跡							
副書名	甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う山梨県民会館跡地周辺埋蔵文化財確認調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第326集							
編著者名	正木季洋							
発行者	山梨県教育委員会・山梨県県土整備部							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行日	2020年3月13日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
こうふじょうあと 甲府城跡	山梨県甲府市 丸の内一丁目 9番1号	19201	253	35° 66' 36"	138° 56' 97"	20180514～ 20180706 20180910～ 20181011	396m ²	遺跡整備
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	城館跡	近世	石垣・胴木・堀		陶磁器・瓦		甲府城一の堀と堀に面した 甲府城築城期の石垣	

要約	本調査区域は、甲府城の南部、一の堀と堀に面する石垣があつた範囲にあたる。昭和初期には石垣が解体、一の堀も埋め立てられ、位置や残存状況等の詳細情報は不明であったが、今回の確認調査により、石垣・一の堀が残存していることや、位置情報も解明された。また、調査区域西部においては、石垣等はすべて削平されていたものの、谷地形を埋め立てた造成層が確認されている。
----	--

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第326集

甲府城跡

甲府城周辺地域活性化実施計画に伴う山梨県民会館跡地周辺埋蔵文化財確認調査報告書

2020年3月8日 印刷

2020年3月13日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

maizou-bnk@prefyamanashilg.jp

発行 山梨県教育委員会・山梨県県土整備部
印刷 株式会社 峡南堂印刷所